

今年の7月26日、祖父が骨折してしまいました。大腿骨頸部骨折です。その日は台風の後で少し風の強い日でした。祖父は自転車に乗って近くのクリニックに行き、その帰り道に坂を下っていたところ突風が吹いて、祖父のかぶっていた帽子がふわりとんでいってしまったのです。祖父はとっさに帽子をおさえたところ、バランスをくずして自転車ごと転倒してしまいました。その時に自転車と道路の間に脚をはさんでしまい、それに気づいた近くの住人や工事現場の人が、かけつけて救急車を呼び病院に搬送されました。直ぐに骨に金属をいれて骨同士をつなぐ手術が行われ、二カ月程入院することになり、かけつけた家族全員安心しました。安心したのもつかのま、直ちにリハビリが始まります。祖父に聞いた所リハビリは最初の方は痛いけれど慣れていくうちに痛みがうすれていくそうです。なにしろ痛くても痛くなくても元の生活に戻るためにはリハビリはとても大切なことだと言います。しかし出来るだけリハビリは痛みがない方がいいです。その痛い期間を短くし、リハビリを手伝うことを理学療法士の方にやっていただきました。

八月中旬頃、病院に祖父のお見舞いに行きリハビリ室で祖父のリハビリを見学しました。祖父は初めて理学療法士の支えなく歩く練習をしていました。ほんの数歩でしたが事故前のように自分の足で歩いていた祖父を見て、本当に良かったと安心しました。祖父もうれしそうでしたが、まだ不安そうでした。理学療法士は優しくやり方を教え、祖父の気持ちに寄り添いはげましていました。また、理学療法士は祖父の自宅に退院後の自宅での生活動作の確認や住宅改修の検討のため家に来ました。例えば手すりをつける場所や介護用品の提案や転倒防止の助言をします。私が一番おどろいたのは自宅でのベッドから起き上がる等の動作をどのように行うかを調べて、病院のリハビリで同じ動作を練習することでした。理学療法士は相手の立場になって考え工夫をしているところが素晴らしいと感じました。

今、社会は高齢化が進み超高齢化社会と呼ばれるまでになりました。具体的に2026年の時点で高齢化率は27.3%、高齢者数は3459万人です。また、2065年には全人口の25%が高齢者になるだろうと予想されています。このままだと親が歳をとって介護が必要になっても介護をする人が足りなくなってしまう60歳以上の私達が介護しなくてはならない事態になります。つまり老老介護といわれるものです。しかしこのような事態になり、もし高齢者が事故にあい、骨折してしまいリハビリが必要になったならば、私達は適切なリハビリの補助ができるでしょうか。多少大胆な補助は出来ると思います。しかし前にも言ったとおり、骨を早く元のようにして、痛みのある期間を短くする必要があります。そこで必要なのが未来の理学療法士の方々です。

これから理学療法士にかぎらず医者や保健師、薬剤師等必要だと思えます。今後の重要な役割を担うと思うのでその人達の今後の活躍に期待したいです。そのような人達の活躍によって高齢者が充実した生活をおくれるような社会になるといいと思います。